ヒーローメーカー！

水無月　一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒーローメーカー！

【Ｎコード】
Ｎ６１８９Ｚ

【作者名】
水無月　一

【あらすじ】
宇宙で唯一の星立であり、様々な種族が混在するエリート学校、桜花繚乱高校。そこに合格して通うことになった1人の少年とその仲間たちの戦いと学園生活を紡ぐ運命の物語。彼らの進む道の先にあるものは明るい未来か、それとも黒い絶望か――。
笑いと悲しみの学園ファンタジーにするつもりです。

第一章　黒鋼色の目を持つ少年（前書き）

初投稿です。至らぬ点があるかもしれませんが、優しく見守ってください。よろしくお願いします。

第一章　黒鋼色の目を持つ少年

――星立桜花繚乱高校。通称サクラ高。

銀河を巻き込んだ大戦を終結させて全ての星に他の星と平和条約と不可侵条約を締結させた、辺境の星に住んでいる学校にも行っていないような小さな子供でも知っている伝説の英雄とその仲間たちが建立に尽力したと語り継がれる、皇立でも帝立でも法立でもない銀河で唯一の星立高校である。

伝説の英雄の建設総指揮、有名設計者のデザイン作成、技術屋集団の技術投入などフロウラル星にある力を全て注ぎ込んで建てられた学校だから、人気の高さによる入学の倍率の高さ、他には見られない前衛的な学校の景観、近代的な設備その他諸々の特長で名が通っている。

中でも異星間交流と英雄の輩出理念の二つが特に顕著だ。

サクラ高は平和の象徴を体現する一環として、普通の学校よりも積極的に他の星からの入学や転学を推進している。その為、サクラ高があるゲッケイジュ皇国には様々な種族がゆったりと闊歩している。

種族や個体によって髪や皮膚の色はまちまちなので、もし鳥瞰で見ることができたら国はカラフルに彩られていると分かるだろう。それを実際に見れるのはごく一部の状況に置かれている人間だけであるが。

サクラ高では、どの学校でも当たり前として習う数学や語学から選ばれし者しか学ぶことがない農学や帝王学、さらには魔法学までを入学時から必修科目として、長所を伸ばしたり短所を克服したりする為の分野を二年目から選択科目として学ぶことができる。

こんな特殊な学習体制を敷かれるのも、全ては人の上に立つ器を持つ人間の才能を発掘、養成して学界、政界、芸能界などあらゆる業界に英雄やスターを送り出す《英雄錬成》のスローガンを果たす

ためだ。
　こうなったのも当然と言えば当然である。何せ英雄が建てた学校なのだから。
　ちなみに英雄を大量に生産するから安いと考えられているからだろう、サクラ高では入学金、寮費、学費が一切かからない。
　今、そんな尋常とは決して思えない学校の校門前に、涼しい顔をしてはいるが喜びや期待といった良い感情を黒色の鋭い目に湛えた一人の少年が佇んでいる。
　少年もまた、サクラ高に通うことになった学生の一人である。
　この学校に通う為に少年はサクラ高の受験生の数倍という計り知ることは到底無理なほどの努力をしてきた。
　それもそのはず、少年は特徴を探すのに骨を折らされる種族、ニンベンであるからだ。

――ニンベン
　あらゆる種族の特徴、能力を全て平均化したような種族。他種族の基礎となっている。銀河一個体数の多い種族でもある。

　優れた面や飛び抜けて目立った特徴がないと進級や卒業することはおろか、入学もままならないようなサクラ高はニンベンからしたら雲の上の存在である。
　そんな考えがはびこっていても、少年はニンベンとして数少ない合格者の一人となったのだ。
　サクラ高では人柄や個性を重要視しているので面接の配点が他校よりも遥かに高い。
　それでも少年は、筆記試験では賢良種族が、実技試験の『受験生全員でバトルロイヤル』では身体能力が高い種族または戦闘種族が好成績を収めている中で大健闘していた。
　何故少年がここまで頑張るのかというと、英雄に憧れていたりなりたいと思っていたりしたからではない。ただ単に、学費と諸経費

が無料だからと大きく夢に近付ける気がしたからである。後者はこの入学試験の難易度や実技における周りのレベルの高さ、面接の質問の内容の深さからそれは予想から確信に変わっていた。

そんなことを感じていた上に合格が決まったから、クールな性格をしている少年でも喜びを抑えられずに制服を着て学生寮を飛び出して下見に来たという訳だ。

しかし、その行動も空振りに終わった。まだ春休みであったから校門は閉まっていて、校内には人がいる気配がしなかったのだ。代わりに少しさびしそうにその場を去る少年の後ろ姿があった。

だが、少年がめげることはなかった。まだ他にも楽しみがあったからだ。

前述した通り、ゲッケイジュ皇国は多くの種族を抱えている。いわゆる『種族のるつぼ』である。その為、この国は宇宙に存在する星の数と同じだけの文明を折衷しており、物質文化や精神文化などを独自のベクトルに発展させている。それは食文化にも該当する。要するに、この国にはおいしい食べ物で溢れかえっているのだ。

いつもは育ての親の家でご飯を食べているから外食する機会がほとんどなかった。なので、少年は今日の昼食を楽しみにしていたのである。

元々貧乏な家で育ったから小遣いは雀の涙ほどしかないが、物欲は全くと言っていいほどなかったから学生としては結構な額を貯めることができたのでここでいくらか使おうと思っていた。

サクラ高の周囲は雑貨屋や本屋、ファッションショップなどを集めた商店街と学生向けに大量に食べることができる料理を安く提供するフードコートでひしめき合っている。こうなったのも、フロウラル星がゲッケイジュ皇国を学園国家にするという政策を施行したからである。

そういう訳で、この辺りには質のいい店がいっぱいある。そんなことを考えながら、少年は横道からアーケードに入って散策を始めた。

せっかくということで、少年はフードコートではなく商店街にあるレストランか飯屋で昼食を摂ろうと思っていた。
案の定そこには知識でしか知らないようなものが多く売られていて、少年にとってそこは新鮮な印象を与えてくれる面白い空間だった。
そのエリアは比較的小規模の商店街ではあるが、いろんな星から集めて愛玩できるようにしたペットショップの動物、まだ読んだことがないような異文化の学術書、おそらくは工業の発達した星で作られたのであろう高性能テレビや災害時用ラジオといった品々が少年の目に飛び込んでは大いに心を踊らせた。しかし、昼食を食べるという目的は忘れないでいた。
少し歩いていると、首飾りや民族衣装などを取り扱っている装飾店と先刻からどう見ても堅気とは思えない人達が出入りしているギャンブル場らしき場所との間に、木造建築で存在感たっぷりの小ぢんまりとした飯屋がぽつんと置かれているのを見つけた。
その飯屋の第一印象は『年季が入った老舗料理店』であり、少年がそこに入る理由としては十分過ぎるものだった。
「《割烹店　豚珍甘》……」
少年は店の名前が書かれた看板を読んで迷いなく飯屋の引き戸を開けた。その瞬間、店内外の気圧差によって正面からそよ風が吹き、少年の鼻腔にそれをくすぐるような甘い醤油の香りが広がった。
しばらく仁王立ちで香りを楽しんでから店内を見渡すと、開店休業よろしく人の気配は関係者と思われる二人ほどしか感じなかった。
何となくだが、少年は当たりを引いたと思った。
「ラッシャイ！　坊主、そんなトコで突っ立ってないで中に入りな！」
声をかけられた少年は店長らしき人物が動き回っている展覧型の厨房の外側に設置されているカウンターの席に着いた。
メニューが載っているであろう冊子に手を伸ばして中を見てみると、そこには十項目ほどしか書かれていなかった。

こだわりか、怠慢か、閃かなかっただけなのかと答えを見つけようと思案を巡らせたが、どれもおいしそうな名前だったのでそれ以上の疑問は断ち切って適当に一つ注文することにした。
「豚の角煮定食」
「あいよ。ところで坊主、見ない顔だがサクラ高の生徒さんかい？」
「今年から入学だ」
「そうかそうかそれはおめでとう。こいつはお祝いだ、飲みな」
そう言った店長は液体の入ったグラスを渡してきた。絶え間なく立つ泡によって水面に作られた小山を見てそれはパフソーダであると判断した。

――パフソーダ
飲んだ後の清涼感にかけては右に出るものがないと言われる炭酸飲料。水面にできる泡の塊が白粉たたきみたいだから『パフ』ソーダと呼ばれている。

「ありがとう」
「水をどうぞ」
そんな素晴らしいものをもらった直後、店内にいた従業員が水の入ったコップを渡してきた。
礼の一つを述べようと、少年は従業員の顔を見上げた。そして息を呑んだ。とても可愛い娘だったからだ。
言うなればその少女は、ウサギやカナリア、ハムスターなどの小動物の愛らしさに割烹着と頭巾を着せたという表現に相応しかった。
少年は正直な感想を口にした。
「可愛いな」
その言葉が出てから数秒間、二人の間は沈黙で満ちた。
その沈黙を破る代わりに、少女は顔を真っ赤にして厨房の中に隠れるという行動を起こした。
すぐに少年は頭の中で、自分の思ったことを何でもしゃべってし

まう癖の所為で辱しめられた少女に小さく懺悔して、たった一言の褒める言葉を聞いただけで全力で恥ずかしがる様子を大きく嘲笑した。

ひとしきり頭の中で笑った後で少年は、何故自分はこの少女を笑うような下卑た性格なのかとふと疑問に思い、不意に自分の過去を思い出していた。それは学生としてはさみしいものだった。

男女問わず誰からも良くて『一匹狼』、悪くて『無愛想』という印象を持たれていて、友人はあまりいなかった。

周りから距離を置きつ置かれつの環境に身を置いていたから全てを達観視、客観視することができた。

だから少年は端から見れば笑えるもののみを笑うことができるのだという結論に達した。

合点が行ったところで、少年はパフソーダをストローでかき混ぜ始めた。そうしながら少年は自分を笑い、誰にも聞こえないように小さく呟いた。

――どうせ同じだ。これから先も。

少年は感情の消えた無機質な目で渦を巻くパフソーダを眺めていると横から視線を感じた。何だろうと思ってその方向に顔を向けたら、先刻の少女が柱の陰から少年を窺っていた。

少女が何か話したげな雰囲気を醸し出していたので、することもないということで少年は手招きで少女を呼び寄せた。

すると少女は嬉しそうにトコトコと歩み寄って近くの椅子に座った。

少年は改めて少女の身体的特徴を上から下まで観察してみた。

露を含んでいると錯覚するほどの輝きを放つショートの青髪、くりくりとした紅眼、身長の割に大きなバスト、腰から足先までの逆台形をした脚線美など少女の持つパーツ全てが一級品だった。

少女の見目は愛情を注がれるべきものというよりも、分け隔てな

く劣情を煽る危険なものというのが適当だった。少年はというと、あまりそういうのに興味は持てなかった。
「さっきの店長との会話を聞かせてもらったよ。あたしはエクレアノ・ドラグーンって言うの。あたしも今年から入学だからよろしくね」
「そうか」
「坊主の呟いた通り、可愛い娘だろ？」
店長が口を挟みながら、少年の注文した定食を乗せた御盆をカウンター越しに渡した。
「なんなら二人共付き合ったらどうだ？　坊主の見た目も悪くないからな」
「て、店長！」
「ガッハッハ！」
豪快に笑う店長とあたふたと慌てるエクレアノのことは既に眼中になく、少年の興味は既に豚の角煮定食に向いていた。
脂が反射してキラキラと光る角煮、良質な素材を使っていることが匂いで分かる味噌汁、御盆の中を彩るニンジンや白菜のお新香、ホクホクと暖かそうな湯気を立てる銀シャリが少年の嗅覚と視覚を刺激した。
すぐに少年は御碗を片手に持っておかずを突っつきながら食べようとした。
「ゴホン、あの、名前を聞いてもいい？」
「むん、俺か？　俺は――」
少年が名乗ろうとしたら、店の引き戸が勢い良く開かれる音がした。
店にいる三人がその方向を見ると、そこには手と膝を地面につけながら店内に入ってくる男がいた。
「邪魔するぜぇ」
その男は、腕や腹は丸太のように太くて立ち上がると2．5メートルを優に越すヤマカンムリだった。

――ヤマカンムリ
体の大きさと怪力が特徴の種族。敏捷性の低さが弱点。

「ショバ代をもらいに来たぜぇ」
「オニールファミリーの奴か。しつこいもんだな。もうここはお前たちのシマじゃねぇ。帰りな」
「そうは行かねぇなぁ。オラ、さっきの博打の負けと借金でスッカラカンなのだぁ。金を寄越しなぁ」
「帰れ。三度目はないぞ」
少年が話を聞く限りでは、ヤマカンムリの男は隣の賭博場で身ぐるみを剥がされたようだった。少年からしたら自業自得の一言に尽きた。
男は店内をキョロキョロと見回して、エクレアノと目が合った。
「この女、花街に売れば高くつきそうだなぁ」
ヤマカンムリの男はエクレアノに近付いて、その細いウエストをぞんざいに掴み上げた。
「は、放して！」
そのまま店を出て行こうとする男を、厨房を飛び出した店長が包丁を持って追いかけた。
「クレアを放しやがれ！」
「うるさいぞぉ」
目一杯伸ばした手に握られた包丁が男の体に触れる前に、圧倒的なリーチを誇る男の腕の先にある掌のビンタが振り向きざまに店長の体に当たった。
モロにそれを食らった店長はカウンターに向かって一直線に吹っ飛び、後頭部を強打して、ガシャンと何かが落ちる音がした中で数回けいれんした後に気絶した。
手出しする気もなく傍観を決め込んでいた少年はエクレアノと店長を哀れみながらも、あわよくばタダ食いをしてやろうと画策し、

定食に箸をつけようと正面を向いた。
食べれることは叶わなかった。店長がカウンターにぶつかった時の衝撃で御盆が下に落ちていた。少年はてっきり厨房内の調理器具が落ちたのだと勘違いしたのだ。
少年は激怒した。エクレアノを誘拐したことでも店長を気絶させたことでもなく、自分が食べようとしていたものを粗末に扱われたことに。
少年は冷たい怒りの表情を浮かべて男を追いかけた。
玄関の引き戸を蹴破って左右を確認すると、男は隣の賭博場のドアを開けて中に入ろうとしていたところだった。おそらくギャンブル場にいる胴元か金回りのいい同業者に売ろうとしているのだろう。幸い、小柄なエクレアノが懸命に暴れて抵抗していたおかげで少しの足止めができていた。
「おい待てウドの大木」
それが男の真後ろまで来た少年の第一声だった。
当然、こんなことを言われた方としてはいい気分ではなかっただろう、男は嫌悪の感情が剥き出しの顔を振り向かせた。
「誰がうどんの買い置きだってぇ？」
それが聞き間違いでも然り。嫌なものは嫌である。
「脳ミソは空っぽだけど耳クソは満タンか。世話ないな」
「何だおめぇ、やるって言うのかぁ？」
「殺るぞ。その前に、大切なものを返してもらう」
「はぁ？　おめぇ、何を――」
そこまで言われたところで少年は男の腹を駆け上がって顎に鋭い膝蹴りを一閃した。
エクレアノを落としてから後ろに倒れた男を見ながら、少年は満足とも不満とも取れる深い鼻息を出した。
「あ、ありがとう……」
少年はエクレアノの謝礼の言葉を意にも介さずに男の許にゆっくりと歩いて行った。

「ぐっ、何しやがんだぁ！」
上半身を起こしながら怒鳴る男。
「何回死にたい？」
そこに間髪を入れずに馬乗りして、胸ぐらを掴みながらドスを利かせる少年。
「ふざけんのも大概に――」
「何回死にたい？」
「ぶっ殺――」
「何回死にたい？」
身長１７５センチの少年が２．５メートル超の大男よりも立場が上になっていることが分かるワンシーンである。
少年の視線から殺意を読み取った男は恐怖と危険を感じて、上からどかす為に手で振り払おうとした。
少年はそれよりも早く顔面に全力の前蹴りを当てて、店長がされたように後頭部を地面に打ちつけさせて失神させた。
諸悪の根源は倒した。しかし、失ったものは戻らない。ただ、この場合は定食一つであって大したことではない。
しかし、昼食にありつけられないというのは学生の身分では死活問題に匹敵することを少年は知っていた。
少年は鳴る腹の虫を押さえながら立ち上がり、フードコートまでの道を調べるためにポケットからサクラ高周辺の地図を取り出した。
何故他の店に行かないのかというと、理由は二つある。店に入るとまたうやむやになって食べられないという悪い予感がしたからと《豚珍甘》と同等かそれ以上の当たりを引く自信がないからだ。
深いため息を吐いて、フードコートへ行こうと歩を進めていたら、
「ねぇ、お腹減ってるんだったらあたしが作ろうか？」
エクレアノが提案をしてきた。
「もちろんおごるわ。助けてくれたんだからそれぐらいはさせてもらうわよ」
そう言って前に回り込んで、少年の俯き気味の顔を覗き込んで愛

らしく笑った。
少年にとっては願ってもいないことだった。
少ない小遣いを奮発して贅沢に使おうとしたが、少しも食べられなかった。仕方なくフードコートで三文飯を食べようとしたら料理を作ってくれると来た。まさに天国から地獄からの天国だった。
「頼めるか？」
「もちろん。期待しててね」
「助かる。節約になるからな」
「いいのよそれぐらい。それに、あんなこと言われたの初めてだから……」
「ん？」
「ああ、何でもないわ」
店内に入ると店長はまだ気絶していたので、椅子を四つ並べてその上に寝かせてあげた。
少年はカウンター席に座って、エクレアノは厨房内で割烹着を巻くって調理態勢を取った。
「そういえばまだ名前を聞いていなかったわね」
「そうだったな。俺は――」

――これは、一人の少年とその仲間たちが紡ぐ物語。

「クロガネ・クロヤマだ」

つらいことも楽しいことも悲しいことも嬉しいこともあらゆるものが織り交ざった運命の物語――。

第二章　変態侍のち勤勉メガネ時々爆発くノ一

クロガネは幸せのダブルパンチを受けていた。それは、一週間以上経った今なお口の中に残るエクレアノの手作り肉丼の味と入学式にニンベンである自分が出席するという事実の二つだ。

特に後者の喜びが大きく、興奮で朝五時に目を覚まして支度を済まし、六時には学校に着いていた。

しかし、その幸福によるやる気の良さも空回りに終わった。ただ今クロガネは校舎の中で一人寂しく趣味の読書に勤しんでいる。

早過ぎたのだ。新入生や在校生はもちろんのこと、教師すらいなかった。

擦り切れるほどに読み尽くした専門書（金がないから新しいのを買う余裕がない）を尻ポケットに仕舞って、二階から中庭を見ようと窓に顔を向けた。

ピントを中庭に合わせる途中に、鏡の役割を果たしている窓に映っているサクラ高の制服を着たクロガネが目に入った。

しばらく眺めていると、自分がサクラ高に受かったという実感が再び湧いてきてつい顔が綻びそうになった。

すぐに自分らしくないと思って、いつもの冷めた目にして中庭にピントを合わせた。

そこの中心には円形に組まれた石垣の中に盛られた土に植えられた一本の巨大な満年桜があり、石垣にあぐらを掻いている着流しのサクラ高の制服と深緑色の髪のチョンマゲが目立つ男の姿があった。

――満年桜

ゲッケイジュ皇国にしか生ることがない希少種の植物。とにかく大きくて美しく映えるピンク色が特徴であり、幸せの象徴として祀られている。

男は小型タブレット端末を見ている。盛大にニヤニヤしながら。
「……気持ち悪い」
というのがクロガネの正直な感想だが、自分と同じように早く来ている人間に興味がないと言えば嘘になる。観察しようと思って近付くことにした。
早速二階の窓から飛び降りて中庭に出た。
大きな着地音がしても、男は相変わらず引くほど気味の悪い笑顔を浮かべて画面に釘付けだった。
見るに堪えないので、男が持っている端末に目を向けることにした。
近付きながら見ていると、それは高画質大容量耐衝撃耐水耐炎エトセトラの非常に高価なものだということが分かった。
そんなものを持てるのは有名流派の宗家か中流以上の貴族かのどちらかしかない。
クロガネは、男がそれを持っていることを妬むことも良家の子息であることを羨むこともなかったが、何万冊もの書物のデータを入力しているのだろうということを予想した。
男の目の前まで来たが、端末の画面に集中している為に気付かれることはなかった。
クロガネは近くで顔を見たことで思い出した。顔に大きな傷をこさえたこの男に見覚えがあった。実技試験のバトルロイヤルでクロガネと戦っていたのだ。
あの時は真剣な顔をしていたから今の顔との違いを見てクロガネは軽く戦慄を覚えていた。
何がここまで人を堕落させるのだろうと思い、画面の内容が気になってきた。
「おい」
声をかけられてやっと傷の男は顔を上げ、クロガネの存在を認めた。それと同時に、顔を血の引いた蒼白色に変えた。
「何者だ！」

傷の男はあぐらを崩しながらベルトに差していた木刀を抜いて、クロガネに襲いかかった。
クロガネは瞬時に尻ポケットから抜き取った専門書を盾にして振り下ろされた木刀を防いだ。
専門書と木刀がミシミシと音を立て、その二つがくっつくのではないかと思うほどしばらくの間お互いに踏ん張り合った。
「やるな、お主……ってあれ？」
「久し振りだな、傷の男」
傷の男はきょとんとした様子から納得したという雰囲気を出した。
「あの時の鋭い目の男！　また相見えるとはな！」
「とりあえずそれを引っ込めろ。本が限界だ」
二人が専門書と木刀の接触面を見ると、専門書は真っ二つに切れそうなほど折れ曲がっていた。
「失敬。何分取り乱していたもので」
「別に構わんがどうしたのだ？」
「それは言えぬ」
「そうか。これ、お前のだろう？」
クロガネは傷の男が落とした端末を拾い上げ、その際に画面を見て凍りついた。エロ画像だったからだ。それも超濃厚なものだった。確かにこんなものを見ているときに人が来たら慌てるのも無理はなかった。
「……家を追い出されても頑張れよ」
「何がどうなったらそんな言葉が出る！？　それよりも返すでござる！」
「これはすごいな」
「何故逃げる！？」
「ほうほう、女体とはこうなっているのか」
次々とページをスライドして、裸の女の画像を脳内にインプットしていく。そういうのとは無縁の生活をしていたので、クロガネにとってはとても興味深いものであった。

「恥ずかしいからやめるでござる！」
「分かった分かった。ほら」
クロガネは仕方なしといった風に端末を差し出し、顔を真っ赤にした傷の男はひったくるようにして取り戻しては頭を抱えてうずくまった。
「あああ、これではセンリョウ家の末代までの恥でござる……」
「気にするな。お前が末代だ」
ピクッと動いた傷の男はユラリと立ち上がってものすごい形相でクロガネを睨んだ。
「お主さっきから何なのでござるか？」
「人をおちょくるのは楽しいな」
「殺す」
「来るか。実技試験の時は相討ちだったからな。リターンマッチと行こうか」
「返り討ちにして進ぜよう」

腕の立つ者や戦いを心得ている者は、勝敗を分けるものは何なのかを知っている。
パワー、スピード、頭脳、技の多さ、武器の性能。どれも要因としては十分大きいが決定的ではない。
一番大切なもの。それは、気持ちの大きさである。
喜び、怒り、哀しみ、楽しみなど人によって適正は百人百様であるが、気持ちが大きければそれに伴って強くなる。
そのことをクロガネはよく分かっていた。傷の男は怒りで強くなることも、薄い感情しか持てない自分よりも強くなっていることも。

「……勝てないな」
幸いにもクロガネはプライドが皆無だったので、背中を向けて全力で逃げることを厭わなかった。
「待て！」

傷の男は右手と右足、左手と左足を同時に出す変わった走り方で追いかけた。
クロガネはその走り方を逃げながらつぶさに観察して確信したことがあったので虚空に呟いた。
「古流武術の走法、ナンバ走り……それにあの剣の腕……やはりあのセンリョウ家か」

――センリョウ家
リットウの家系の一つ。兵科の一つであるサムライと呼ばれる職業を専門にしていることが特徴。古代より存在する名家だが、家長が伝説の英雄の仲間の一人として行動を共にしていたことで一躍有名に。

――リットウ
白兵、特に日本刀の扱いに精通した種族。いいとこの育ちが多い為に癖のある性格の人間も多い。

「それにしても癖ありすぎだろ」
人がいない往来はないほどの人口過密なゲッケイジュ皇国でエロ画像を見るために朝早く学校に来るような人間に癖がないとはおだてにも言えなかった。
そんなことを直接言っても火に油を注ぐだけだったので、何も言わずに十分ほど逃げ続けた。
クロガネと傷の男は１００メートル１１秒台後半という高校生、それも新入生としては考えられない速さで中庭と校舎を駆け巡った。
「お主が生きていたら拙者の人生破滅でござる！　大人しく死ねえええぇ！」
「死んでも御免だ」
傷の男は追いかけている間中ずっと木刀でカマイタチを飛ばしており、窓を割ったり壁に穴を開けていたりした。

学校が破損していくのを気にすることもなく、クロガネは巧みに避け続けた。
二人が南側校舎と北側校舎の三階を繋ぐ空中廊下を走っている時、傷の男が飛び上がった。
「食らえ、焔突葬除！」
木刀は炎を纏い、それを突きつけられた廊下は爆発して真ん中から崩れ落ちた。
クロガネは落ちていく廊下を壁蹴りの要領で傷の男に向かって飛び、思いっきり両足を揃えたドロップキックををかました。
傷の男はそれを木刀の腹で受け止め、二人は同時に空中で後ろに飛び退き、クロガネは二階の北側校舎に、傷の男は二階の南側校舎に着地した。
二階にある二人の間の空中廊下は上から落ちてきたガレキによって連鎖的に崩れ落ち、合流するには他の空中廊下へと回り込まなければならなくなった。
余裕ができたクロガネは見た目からも余裕綽々といった風に逃げ続けた。
「待て！　そこから動くな！」
そんなことを聞くはずもなく、適当に引き戸を開けてそこに逃げ込んだ。
クロガネが入ったところは北側校舎の二階全体が図書室であるそこだった。
図書室は迷路のように複雑かつ広域であり、クロガネが興味本位で適当に抜き取った一冊も絶版になったマニア垂涎のものであったということもあって、明らかに国が建てる図書館よりも金がかかっているということが分かった。
「これはすごい」
追われている身であることを忘れてそれを読もうと机を探そうと入り組んだ図書室の中をさまよって、何とか机を見つけるとそこには先客がいた。

その先客は、真ん中分けのピンク色のおかっぱ髪と碧眼が奥にある額縁メガネが特徴の理知的で礼儀正しい雰囲気を持つ少年だった。
机は八人掛けだったので相席していいか聞いた。
「座ってもいいか？」
「どうぞ」
ギリギリ聞き取れるほどか細く小さな声で許可をもらったクロガネはメガネの少年の正面に座った。
「随分早起きなのですね」
「そっちこそ」
「寮にはいたくないですし、ここだといくらでも本が読めますから」
「気が合いそうだな。俺はクロガネ・クロヤマ。お前は？」
「サンディ・マディアントです。よろしくお願いします」
「よろしく、マディ」
二人があいさつを交わした直後、図書室の引き戸を荒々しく開け閉めする音がした。
「来たか。ここには誰もいないと言ってくれ」
「？　はい」
クロガネが机の下に隠れて気配を消した辺りで右手に木刀を持った傷の男がやって来た。
「そなた、この近くで目つきの鋭い黒髪の男を見ておらぬか？」
「その人はさっき出て行きました」
「そうでござるか。情報感謝する」
傷の男は急いでその場を後にして、出ていったことを確認したクロガネは机の下から這い出た。
「ありがとう。助かったぞ」
「礼には及びません」
「ところで何を読んでいるのだ？」
「工学についての本です」
そう言ってサンディが見せたものは、伝説の英雄の仲間の一人が原作、監修した機械工学と電気工学、重兵器の応用、発展について

記された辞書よりも分厚い書物だった。
その仲間は体が弱く、前線で戦える肉体的な強さを持ち合わせてはいなかったが不世出の頭脳を持っており、それを遺憾なく発揮する為に後方からの支援に徹していた。工学から医学まであらゆる理系学問に精通しており、仲間を生と死の狭間から救った回数は数知れなかった。それによって定着した異名が《生死点者（デッドオアアライブ）》だった。
そんな者が書いた本を読む人間はファンか超勤勉かそのどちらもである者しかいなかった。クロガネはサンディがそのどちらも兼ね備える良い意味での変態である気がした。
「お前、ゴンベンか？」

――ゴンベン
賢良種族。卓越した頭脳と知識欲、やや脆弱な肉体が特徴である。《生死点者》もこれに該当する。

「この本を読んでいたらそう思いますよね。その通りです」
本をブンブンと揺らしてみせるサンディは素直にクロガネの指摘を認めた。
「だろうな……んむ」
クロガネは本に囲まれていることを思い出した所為か急に眠たくなり、その場で伸びと大きな欠伸を一つした。
「眠い……」
「それなら屋上がいい休息スポットになっていますよ」
「そうなのか。では屋上で寝るか」
「いってらっしゃい」
クロガネはサンディに見送られ、本を元に戻してから図書室を出た。
寄り道で購買部の近くにある自動販売機まで行き、起きた時の眠気覚まし用にポップコーラを買ってから屋上に伸びている多くの階段の一つを上り、その途中で眠気を誘うための専門書を尻ポケット

から取り出した。そして少しがっかりした。原形を留めていないほどひしゃげていたからだ。

――ポップコーラ

パフソーダと双璧をなす存在の炭酸飲料。口に入れた時に唾液と反応して小さな揮発をかなりの数と速さで起こし、爆発しているような感覚になる面白さで若者に大人気。

クロガネの持っている数少ない本だったが、気にすることなく自力で寝ようと考えた。図書館で一冊持ってくれば良かったとも考えたが、朝早いということで司書がおらず、借りることはできないことをすぐに思い出した。

まだ春先の朝ということで陽は浅いこともあったが、良い日和だったので気持ちよく寝ることが期待できた。

階段を上りきった先にあるドアを前にした時にそれを一枚隔てた屋上から耳をつんざく爆発音が複数回鳴った。

誰かいるのか、寝ることは可能なのかを確認すべく勢い良くドアを開けて正面を見据えたところ、黒い服を着ているのか先刻の爆発で炭を身に纏ったのかは不明である全身真っ黒のヘアゴムで一本にまとめた長髪の少女が咳き込んでいた。

長髪の少女の周りにはこまごめピペットやアルコールランプなどの実験道具の数々と二尺から五尺までの多くの火薬玉が散乱していた。

クロガネに気付いた長髪の少女に開口一番、

「ひゃれだひさま（誰だ貴様）！」

と言われた。

「お前が誰だ」

と切り返した。

ここで長髪の少女は自分のろれつが回っていないことに気付いたらしく、誤魔化さんばかりにまくし立てた。

「ひさまがひきなひひょびらをふぁけたへいでひっくりしてひゃやくのひょうほうりょうにごひゃがひょうじてびょうふぁふひたほ！」
「貴様がいきなり扉を開けたせいでびっくりして火薬の調合量に誤差が生じて暴発したぞ……か。こっちとしてはいい迷惑だ」
「ひゃ、ひゃへれない（しゃ、しゃべれない）……ふぉうひよう（どうしよう）……」
「拳で語れ」
「ひぇ！？」
クロガネは指の関節をボキボキと高かったり低かったりする音を出して長髪の少女に一歩一歩近寄った。
長髪の少女はクロガネの姿に鬼気迫るものを感じて腰が砕けてしまい、後ろにずり下がった。
「みゃへ（待て）！　ひはふぉはんへひるひゃけだきゃらみゃへ（舌を噛んでいるだけだから待て）！」
目の前まで来たクロガネに手を突き出された長髪の少女は恐怖で目をつむって身を震わせた。
「というのは冗談だ。飲め」
「へっ？」
「舌を噛んでるのだろ？　これで冷やせ」
クロガネの手は殴る為ではなく、握っているポップコーラを渡す為に突き出していたのだ。
最初は何のことかと理解できなかった長髪の少女は自分の為に差し出されていることに気付いて受け取るまでに数秒かかった。
「ひゅ、ひゅまはい（す、すまない）」
「そう思うなら早く治すのだな」
クロガネは寝るために頭を手で支える形にして横になった。
長髪の少女は口に含んだ冷たいポップコーラをしばらくの間放置して舌を冷やそうとした。
そうしている時も実験道具をいじくって火薬を作っているのか、何度も暴発させたり周りの火薬玉に引火させたりしている爆音の所

為で、クロガネは眠りの淵を登り降りしていた。
寝ることができなかったので、長髪の少女の方に体を向けて聞くことにした。
「何をしているんだ？」
長髪の少女はポップコーラが揮発していて質問に答えるどころではなかった。どう対応すればいいか分からずにジタバタしたり地団駄を踏んでいたりして試験管やビーカーを倒したり火薬玉を暴発させていたりしていたいた。
「ああそうだったな。早く飲み込め」
「――っぷはぁ！　おい、何だこれは！」
「それよりも良かったな、舌が治って」
「……本当だ。一応礼を言うぞ」
「それはどうも。俺はクロガネ・クロヤマ。お前は？」
「……エリミネイト」
「名前は？　それは名字だけだろ？」
「……言いたくない」
そう言いながら、長髪の少女は目に涙を溜めて、今にも溢れ出そうな状態になっていた。
「何故？」
普通の男なら乙女の涙があれば根掘り葉掘り聞くのはためらわれるだろうが、クロガネの場合は無関係であり、容赦なく質問した。
「……みんな私の名前を笑う」
「笑えるものかどうかは俺が判断する。言え」
クロガネの命令口調に完全に気圧された長髪の少女は涙腺を崩壊させながら答えた。
「……カラシ」
「んっ？」
「カラシだよ！　笑いたきゃ笑えよ！　どうせあんたも笑うんだろ！　変な名前だってよ！　こんちくしょ～～」
ついでに人格も崩壊させながら。その場にへたり込んでワンワン

と泣いて地面を何度も叩いた。
女性座りから覗かせるカラシのすらりと長い美脚が何とも魅力的であり、クロガネがそれをジッと眺めながら答えた。
「どこが笑えるんだ？　いい名前過ぎて全然笑えないんだが」
クロガネは思ったことを何でも正直に話す素直で口が軽い性格であり、笑えるものしか笑うことがない真実を見抜く目を持っている。それは他人はともかく自分がよく分かっていることであった。
「全然面白くない」
「……本当？」
カラシが上目遣いでクロガネを見た。今は真っ黒ではあるが、なかなかの美人であるカラシがこんなことをしたら普通の男にとっては破壊力抜群だろうが、クロガネにとっては痛くもかゆくもなかった。
「ああ。すごくうまそうな名前としか感じない」
クロガネは自分がよだれを垂らしていることに気付いていない。
「ふふっ、そんなことを言ってくれたのは貴様が初めてだ」
「食べていいか？」
盛大によだれがこぼれ落ちているクロガネが立ち上がってにじり寄り、クロガネのよだれを見たカラシは何を誤解したのかものすごく恥ずかしがった。
「な、何を言う！　私たちはまだそんな関係ではないだろうが！」
「もう我慢ならんのだが」
クロガネは見た目と口調が相まってクールな性格と見られることが多々ある。それは間違いではない。ただ、付き合えば分かるのだが、食い意地を張っていたり食べることに並々ならぬこだわりを持っていたりと食に対する姿勢がとてもシビアであることもまた事実である。食べ物を前にした時のクロガネの目にそれ以外のものが入ることがない。
今のクロガネの目は完全に食べ物を前にした時のそれであった。
カラシはカラシで、クロガネの目が欲情している時のものと勘違

いしていた。
「ほら！　これを返すから我慢してくれ！」
カラシは蓋が開いたポップコーラの缶を返して、高鳴る胸を落ち着けようと再び火薬玉を作る作業に取り掛かった。
缶を手に取ったクロガネは正気に戻り、ポップコーラを一気にあおった。
口の中が爆竹のように弾け、それを苦労して飲み込む快感と寒気が全身を震わせて、眠気も全部吹き飛んでいった。
「これは効くな。そういえば俺、何か変なこと言ったか？」
「知りません！」
カラシがそっぽを向いてしまっていたので、仕方なく他の場所に行くことにした。
「またな、カラシ」
「ま、またな……」
頭の上に缶を乗せてバランスを取る遊びをしながらフラフラと階段を下りるクロガネ。

――今日出会った運命の仲間たちは三人。

「さて、次はどこに行くかな」

次に会う仲間はどんな人間なのか、また、それを知るのは誰なのか――。

第三章　信仰猛獣たまに過去の記憶ところにより賭博中毒

サクラ高は大きい。
どれぐらい大きいかというと、五十の公認クラブ、非公認を合わせると百を超えるクラブにのびのびと活動させられるほどだ。
規律を破った生徒または教師に処される厳罰の一つとして『一日かけてグラウンド掃除』というものがあったり授業参観や三者面談の時などで迷子になる父兄が続出したりするという表現もできる。
誰の目にも付くほど行動的で好奇心の飢えを満たす為に活動的であるクロガネにとってはそれぐらいないと張り合いがなかった。
そして、傷の男に追われまくって校舎内の教室の配置を全部覚えてしまった当のクロガネは今、
「誰だ？」
暇つぶしに校内に設置されているリンドウ教の教会の二階に立ち寄っていた。
クロガネには宗教に対する興味は一切なかったが、教会の頂上の十字架にあしらわれたリンドウの花の飾りとリンドウその他諸々の花がうっそうと繁っている教会の外壁が歴史を感じさせて面白そうだったので寄ってみたのだ。
「テメェが誰だ」
中にはサクラ高の制服を着ていて丸みを帯びた大きな獣耳と燃え上っているかのような逆立った白髪が特徴の男がいた。
振り向いた獣耳の男は、男というよりも少年という言い方がふさわしいぐらい幼い顔立ちをしていた。
「邪魔だったら出て行ってやろうか？」
「そう言うな。さみしかったところだったからここにいろ」
相席するように言われたクロガネは素直にその注文を聞き入れることにして、両膝立ちでお祈りを捧げている獣耳の少年の隣に座った。

獣耳の少年のお祈りの相手は民衆を前に優しく微笑んでいる翼の生えた聖人であり、民衆を優しく見ている聖人に獣耳の少年が尊敬の眼差しを送っていた。
聖人の持つ優しい空気と獣耳の少年の目を見たクロガネは、聖人は天使のような人であり人々に慈善の限りを尽くしていたのだと分かった。
「優しい人だったのだな」
「おお、分かんのか？」
「何となくだがな」
「テメェもリンドウ教の信徒か？」
「信徒？　バカも休み休み言え。神などこの世に存在しない。それだけは絶対不変の真理だ」
「いんや、神は存在する。絶対だ」
「では何故神は俺を助けない？　何故哀れで残酷なこの俺を助けないのだ？」
この時のクロガネはとても冷たい目をしていた。自分を蔑み、完全に否定するとても暗く冷たい目を。
獣耳の少年はクロガネの黒の瞳に吸い込まれそうな錯覚を覚えると同時に、背筋どころか身体中に悪寒が走るのを感じていた。
「テメェ……何があったらそんな目をすることができんだ？」
「話す気はない」
「……なぁ、俺たち友達になろうぜ」
「理由は？」
「一方的な理由だが、テメェを知りたくなってきたからだ」
「俺は別に興味はないのだが」
「そう言うなよ。俺はスココ・ヤカカ。見ての通りライガーのケモノヘンだ」

――ケモノヘン
動物の血を持つ種族。特徴や弱点は動物の種類によって様々。

「クロガネ・クロヤマだ」
「そうか。テメェは諦観と絶望の色が強いが、いい目をしている。凄惨な過去があったんだな」
「……」
「わりぃ、これ以上は何も言わねぇよ」
それから二人は何も話すことはなく、それぞれがしたいことをすることにした。
スココは相変わらず祈り続け、クロガネは振り向いて入口の上にあるかけ時計に目をやった。
時刻は7時15分。そろそろ寮にいる気の早い生徒たちが登校を始める時間になっていたが、入学式兼始業式までまだ時間があった。
クロガネは再び襲いかかってきた眠気に身を委ねようと、適当な時間になるまで教会に並べられている大量の長椅子の一つに横になることにした。
まどろむ目の中に天井に凝らされた天使、聖人と悪魔、魔神の戦争の場面の意匠と常人には到底理解できないセンスである螺旋形の燭台を最後に入れて双眸を閉じた。

直方体や立方体の白石造りの建物がぽつぽつと立っている砂漠の風景があった。家屋を削るのではないかと思えるほどの豪雨が降っており、一人の少年にも等しく打ちつけられていた。　その少年はクロガネよりも低い視点から街並みを見ていた。集落全体はとてもさびれており、視点の主である少年以外の生命の存在を拒絶するかのような閑静さだった。
視線はその主と思われる腹に向きを変え、痩せ細った小さな手で腹をさすっている。腹の虫の音からかなりの飢餓で苦しんでいるようだった。
ぐらぐらと定まらない視点が前方に動き始め、一つ一つ建物の傍

まで寄って次々と窓から中を覗き込んでいく。中には何もないことを知ってため息を吐こうとしたが、残っていない体力ではそれをすることさえも許さなかった。

ふらつく足で大きな廃墟となった五階建てのテナントビルに入り、少しでも腹の足しになるものを探し出す。

一階は砂塵が舞っていたり上部が崩落していたりでとてもものを探せる状態ではなかった。

ビルを出て砂漠の集落をさまよう少年の目に希望はなく、全てを諦めた絶望の色をしていた。

体力の限界が来た少年は膝から崩れ落ち、集落の真ん中で砂煙を立てて横になった。

――周りに支えられてきた自分一人では何もできない。

――この世を見守る神は自分を見捨てている。

――償えない罪を背負う自分を誰も助けてくれない。

皮肉にも死ぬ直前になってこの世で生きていくために知っておくべき自然の摂理と事実を知った少年は哀れな自分がおかしくてたまらなく、最後の力を振り絞って自らを嘲笑った。うつ伏せになったまま砂漠中にこだまするぐらいに強く嘲笑った。

笑いながら目には涙を浮かべていて前が見えなくなっていた。掻く汗も飲む唾もなくなって、体の水分は抜けきってカラカラになっているはずなのに涙が止めどなく溢れてきた。死に対する恐怖はないのに、顔の横に涙が流れる。

どうして涙が出てくるのか。答えは一つ。後悔があったからだ。

罪を犯したことではない。

生きていけないことでもない。

今まで環境の所為にして何もしなかったに後悔していた。

つらかった。

悲しかった。

苦しかった。
でもそれに自ら終止符を打つことができる状況になった。
全てを終わらせようと、少年は雨降る砂漠で静かに目を閉じ、まぶたの裏を見据えた。雨が体温を奪い、終焉の音が確実に近づいてきた。少年の許に駆け寄る足音と共に――。

「……夢か」
横になったまま頭の後ろで腕を組んで、それを枕にしているポーズを取りながら目を覚まして一人呟いた。
寝ぼけまなこを擦ろうと、指を目の下に添えたら指の側面が濡れていることに気付いた。クロガネは泣いていたのだ。
「いつまで俺を縛るのやら」
物事に向ける視点と共に風景を変える為に顔を横に向けると、スココがまだお祈りをしていた。よくも飽きずに続けられるものだとクロガネは感心してしまった。
体を起こしてかけ時計を見ると、時刻は8時ちょうどを指しており、視線の先を少し下げて出入り口に向けると、ドアの隙間から殺気のオーラが漏れているのが確認できた。
一緒に気付いたスココが何なのかを知る為に祈祷の構えのまま質問した。
「クロヤマ、ありゃ何だ？」
その殺気には一種の焦りのようなものも含まれており、すぐに誰なのか断定できた。
「名付けるなら、『変態侍』ってところだな」
「？」
スココが疑問の意を顔にしているのを無視して、クロガネは眠いのを我慢してドアを凝視した。
「ヤカカ、裏口とかあるか？」
「左奥の扉がそうだ」

「そうか」
クロガネは言われた扉に向かって駆けて、扉を開けては非常階段の手すりを滑り降りて行った。
クロガネが出て行ったのとすれ違いに出入り口の観音扉の両側が開かれ、傷の男が飛び込んできた。
傷の男は肩で息をしており、ギラギラした目で教会中を見回し、クロガネがいない代わりにスココを見つけて涙目になりながらすがるように問い詰めた。
「そなた！　ここで黒目黒髪の男を見かけておらぬか！」
スココは傷の男の目と殺気を見て危険と判断し、急いでこの神聖な場から排除しようと考えたが、挙げられた特徴からクロガネのことを言っていて狙っているのだと予想し、追い出すことから足止めすることにシフトチェンジした。
「それならさっきどっかの椅子の下に隠れたのを見たぞ」
「そうでござるか！　ありがたい！」
傷の男はスココに礼を言い、顔と胸を地面に押し付けながら這いずり回って椅子の下を探り、そのみっともない姿と動きを見て吹き出しそうになったスココであった。

サクラ高は学生中心の全寮制学校である。
朝食は生徒が起きる前に職員が調理を終わらせ、自由な時間に起きた生徒各自が朝食を受け取っていく仕組みになっている。学校の教室や図書室、訓練室で自習や鍛錬をしたい生徒への対処である。
勤勉の生徒は登校が早く、不真面目な生徒はホームルーム開始ギリギリに登校するようになっている。つまり、登校時間が生徒のやる気のバロメーターとなっている。
そのやる気の向かっている方向が勉学や修行以外のものでも然りである。
『校門近くで催し物をしている生徒とそこに集まっている生徒。今すぐ解散しなさい。繰り返す――』

校内全体に教師と思われる声のアナウンスが響き渡り、生徒の注意を集めた。
クロガネはパーティやお祭り騒ぎが大好きであり、小さい頃からよく育ての親と共に祭事のある神社や広場に行っていた。なので催し物と聞いて、食べ物を食べる時と同じぐらいに目を輝かせた。
しかし、教会は校門の対角であるグラウンドの隅に位置する。つまり、かなりの距離があるので急いで行かないとその催し物もたたまれる可能性があった。
どうしても何をやっているのかを見たかったクロガネは、傷の男に追われていた時よりも速く足を動かして大量のパイプ椅子(いす)が並べられていたグラウンドを横切りながら校門に向かった。

「さぁ張った張った！　ここで勝ったら始業式の帰りに遊べるよ！」
景気のいい声と甲高い拍子木(ひょうしぎ)の音で大勢の人を呼び寄せる、美少女とも美少年とも取れる中性的な顔立ちと大きなシルクハットが特徴の人間がいた。
群衆のざわめきとシルクハッターの声の所為でアナウンスの声を聞かせる隙を与えていなかった。
ブルーシートが広げられていたそこは簡易賭博場になっていて、そこに集まるのはシルクハッターの顔目当てである男女を問わない観衆と賭けに熱中している博徒となった生徒、それと野次馬だった。
「今来た人たちに説明するよ！　今回は初日ということで簡単な『丁半』をやっているよ。控除率はなんと０パーセント！　振るって参加してちょーだい！」
シルクハッターはツボの中に二つのサイコロを投げ込み、慣れた手つきでツボを地面に立てた。
「丁か半か、張った張った！」
「俺、丁！」
「半よ！」
「丁だ」

次々とチップの代わりである木札が前に出され、それを確認したシルクハッターがツボを開けた。
「サニの半！　お嬢さんの一人勝ちだね」
ニコニコするシルクハッターは場にある全ての木札を一旦回収して、一人勝ちした女子生徒が賭けた二倍の枚数の木札を彼女に手渡した。
「やった！　ねぇこれ換金してよ」
「毎度！　木札二十枚だから１０００ティラだね。また来てね」
女子生徒は自身の持つ木札をフロウラル星の通貨と交換してもらい、嬉しくて正座のまま小躍りしていた。
その様子を男子生徒が爪先で地面を叩く貧乏揺すりをしながら憎々しげに見ていた。
男子生徒は視線の先をシルクハッターに変えて低い声で言った。
「お前、イカサマしてるだろ」
「はい？」
「さっきから俺ほとんど勝ってねぇんだよ」
「それは、今回ばかりは旦那の運が向いていなかったってことだね。実に残念だね」
「うるせぇ！　今すぐ金返しやがれ！　さもないと痛い目見るぜ」
「そんな！　ウチは良心に沿った営業をしているよ！　そんなことされる筋合いはないよ！」
胸の前で手をぶんぶんと振っているシルクハッターは強い否定の意思を見せているが、恐怖で顔の血の気が失せていた。
男子生徒が立ち上がり、ツボやサイコロを蹴飛ばしたりシルクハッターの手に持っている木札を平手で払い落としたりした。
女子生徒はお金を持って逃げ出し、賭けに参加していたもう一人の男子生徒は羽交い絞めで暴れ出した男子生徒を止めようとしたが、後頭部による頭突きを鼻に受けて痛みで悶え転がった。
男子生徒が右手を大きく振りかぶったのを見たシルクハッターはせめてもの抗いとして手で顔をガードした。

「やめろ」
拳がシルクハッターにあたる直前、男子生徒の二の腕を掴んだ黒目黒髪の少年がいた。全速力で走って何とか校門にたどり着いたクロガネだった。
振り向いた男子生徒はクロガネと目が合い、睨み合いになった。
もちろんその戦いに勝ったのは、鋭い上に深い黒色の瞳の目を持つクロガネであり、呑まれた男子生徒は若干の恐怖の色に染まり、仕方なく実力行使に出ることにしてフックで殴りかかった。
それをくぐって避けて後ろに回り込み、対象の腰に腕を回してクラッチ、それから後ろにいるシルクハッターに気を付けながら後方に反り返して男子生徒を地面に叩きつけ、一発でノックダウンさせた。見事な弧を描くジャーマンスープレックスホールドだった。
ホールドを解いて立ち上がって砂を払い落とすクロガネにシルクハッターが数枚の木札を持って一歩近寄った。
「かっこ良かったよお兄さん。おかげで助かったよ。これ、お礼にあげるよ」
「何だこれは？」
「ウチの店で使えるチップだよ」
「いらん。それよりも知りたいことがある」
「何だい？　何でも言っていいよ」
「お前の性別は何だ？」
瞬間、シルクハッターの愛想のいい笑顔が固まった。
クロガネはただ群衆の中にたまに現れる暴漢を処分しようと考えていたから、シルクハッターの顔は目に入らずにいた。そしてたった今見たシルクハッターの顔を見て疑問に思ったから聞いた次第だった。
ちなみに言うと、それはその場にいる人間全員が分からずにいたが、誰も口に出さないので言えなかったことだった。クロガネが自分が思ったことに正直な性格でいたが為にその謎が解かれようとしていて好都合だったので、観衆はクロガネとシルクハッターの二人

を見守ることにした。
　誰かが唾を飲む音がした。誰かが頭を掻く音がした。遠くで鳥が羽ばたく音がした。そんな日常の些細な風景が切り取られるほどの静寂だった。
「え～っと、そんなこと誰でも分かることだよ」
「誰一人として分からないと思うが？」
　そこにいる二人以外の全員が頭を揃えてうなずいた。皆の心が繋がった瞬間である。
「それにほらウチ、スカートはいているからわかるよね？」
「その下に男子の着る制服のズボンをはいているではないか」
　クロガネの言う通り、シルクハッターは男子の格好にスカートをつけるという変態的な格好をしていた。これも誰も突っ込めずにいた点であった。
「う～んごめんよ、教えられないや」
　そう言われ、全員が残念そうにため息を吐き、その際にクロガネはツボとサイコロを見下ろす形になって、ほうと言葉を漏らしながら興味深げにそれらを拾い上げた。
「丁半をやってたのか」
「そうだよ。お兄さんもやる？」
「いいことを考えた。その情報を賭けろ」
「と言うと？」
「俺はチップを賭ける。お前は『自分の性別』という情報を賭けろ。安いものだろう？」
「それでもウチには割に合わないな」
「じゃあこれもベットしてやる」
　クロガネはあるものを差し出した。校舎の屋上で飲み干したポップコーラの空き缶だった。
「何でこんなものを？」
「これを製造している会社が缶の製造ナンバーを宝クジの抽選ナンバー代わりにしているんだ。お前に億万長者の権利をくれてやる」

はたから聞けばおかしいことこの上なく、現にその場にいるほとんどの人間の頭の中にクロガネをバカにする軽蔑の言葉が渦巻いており、中にはこらえ切れずに笑い出す者もいた。先刻まで全員がクロガネを心の中で応援していたにも関わらず、だ。

「いいよ」

だが、この場合は別だった。

「勝負はお互いの選択が違った時の一回きり。それでいいね？」

シルクハッターは缶を手に入れて億万長者になって裕福な生活をしている自分だけを思い描いていた。

「いいぞ」

こうなるように仕向けたクロガネの策略はこうだった。まず初めに、学校に来てまでギャンブル場を開くほど賭け事が好きなのだと判断した。次に、だからこそお金が大好きなのだと連想した。たったのこれだけである。

こう説明するだけだと簡単だと思ってしまいがちだが、実際にこんなことができる者はほんの一握りの人材である。物事の本質を見抜くということは相当に難しいことなのである。

二人はその場に座り、シルクハッターがツボと二つのサイコロを顔の前に掲げた。

「入ります」

ツボの中にサイコロを入れ、地面に立てた。観衆の間に緊張が走った。それに比べてクロガネは随分と冷静だった。シルクハッターは夢見心地だった。

「半だよ」

「ピンゾロの丁だ」

『『『！？』』』

クロガネ以外の全員が驚愕した。三十六分の一を当てようとしているからそれは当然であった。

だが、その驚愕はすぐに失笑へと変わった。

「フフッ、当たると思っているの？」

「確かにそうだな。じゃあ丁だ」
シルクハッターがツボを開けた。始めは驚き、次に呆れだったこの流れの最後を驚きで締めた。なんと最初の宣言通りピンゾロの丁だったのだ。
誰もが開いた口が塞がらなかった。クロガネ本人も少し驚いていた。
「な、何で分かったの？」
その質問に対してはっきりと、しかし簡潔に答えた。
「勘だ」
クロガネの発したたった二文字の単語の為に全員の開いていた口がさらに大きく開いた。
「俺の勝ちだな。じゃあ約そ――」
「すいませんでした」
シルクハッターは名刺ほどの大きさのカードを一枚目の前に置いて、脇目も振らずに見事な土下座を決めて頭からシルクハットを落とした。
群衆がざわめき、クロガネはそれを無視してシルクハッターの赤髪から反射して目に入る太陽光を手で防ぎながら硬質のカードを拾い上げた。
「それで勘弁してください」
「何だこれは？」
「それで勘弁、してください！」
シルクハッターは必死の形相でクロガネを見上げ、何度も嗚咽を漏らしていた。かなり追い詰められていたのがありありと分かる状態だった。
その様子を気に留めることもなく、カードについて詳しく調べることにした。
純銅で作られたカードの土台に銀の花の装飾が施されており、上部に黒の文字が印刷されていた。『私立桜花繚乱高校公認一年間学生食堂無料利用券』と。

クロガネはヨダレを垂らさないように唇をなめた。
サクラ高の学生食堂は寮で摂る昼食とは別に食べることができる施設である。出されるメニューのは大量生産の寮食よりも格段に良質であり有料である。
だから貧乏なクロガネにとって学生食堂は無用の長物以外の何物でもなかったが、タダで使えるとなったら話は別であり、のどから手が出るほどほしいものだった。しかし――。
「それでも性別が知りたいな」
何回も言うように、クロガネは自分に正直な性格である。クロガネ自身は無料券よりもシルクハッターの性別の方が気になる対象であった。
敗者は勝者の言葉に絶対服従である。常に勝負の世界に身を置いてきたシルクハッターが良く理解しているルールに近いことであるが、今はそれにも抵抗したい気持ちだった。
窮鼠猫を噛むとは良く言ったものである。ただ、この場合のネコは無慈悲だが無邪気であり、ネズミは猫に噛みつく勇気と無謀さを持っていなかったという点で違った。
「お願いだよ～お兄さ～んこれで許してよ～頼むよ～」
シルクハッターは許しを乞うために情けないしゃべり方をしながらクロガネの制服を掴んで泣きすがった。
「そ、そうだ、これもオマケであげるからね！　ねっ、いいでしょ？」
今度は猫なで声ですりよりながら二枚のチケットをシルクハットから抜き取って、クロガネの手にしっかりと握らせた。それは映画の観賞券（有効期限なし）だった。
これ以上話を引っ張るのはシルクハッターに酷であるだけで、何も搾り取ることはできないと判断して譲歩することにした。
「まぁいいだろう」
「本当？　助かるよ！」
「こらぁ！　解散しろと何回も放送で言っておるだろうがぁ！」

シルクハッターが手放しで喜んでいるところにネクタイを付けたおそらく教師と思われる怒鳴り散らす男を先頭にした教師陣が突っ込んできた。
『やべっ、シリ先だ！』
『逃げろ！』
『捕まったら指導室行きだぞ！』
そんな言葉が一同の口々から発せらてクモの子を散らすように逃げる中、シルクハッターは慌てて木札やお金、商売道具をシルクハットの中に吸い込ませるように仕舞って、クロガネはブルーシートを折りたたんであげていた。
「何から何までありがとうね」
「礼を言われる筋合いはない」
「わお、やっぱりかっこいいね。惚れちゃいそうだよ」
「女だったら大歓迎だ」
「それは教えれないよ」
「ふん。逃げるぞ」
「うん」
二人は逃げ惑う人ごみの中に紛れて別れ、入学式兼始業式開始予定場所であるグラウンドまで走ることにした。
クロガネは脚力を最大まで溜め、人と人の間を縫うように駆け抜けた。
「やっと始まりか」
――ついに運命の仲間たちと顔合わせを果たしたクロガネ。
「楽しい学園生活になると嬉しいがな」
彼らと歩む道は荊(いばら)が生い茂っているのか、それとも花が咲き誇っているのか――。

第四章　因縁の作り方

サクラ高には1クラス６０人が7クラスあってそれが3学年の約１２６０人の生徒が通っている。

そんな人数がいくら大型の体育館でも入るはずがなく、学校全体行事や集会がある時は基本的にグラウンドで行われる。無論入学式兼始業式も例外に漏れない。

入学式兼始業式の時に座る席は新入生に限ってクラス、体格、入試成績など全ての要素を排除したランダム指定席である。最初からクラス分け通りの席に座らせて生ぬるい連帯感を生ませず、周りにいる人間は敵かもしれないという緊張感を持たせるための学園上層部の配慮であると言われている。

どこに座ればいいかは郵送された合格通知と同封されている透明なナンバープレートと椅子の背もたれに貼られているシールのナンバーと照らし合わせれば分かるようになっている。さらにナンバープレート越しにシールを見ると、自分の配属されたクラスが浮かび上がってくるという仕組みになっている。これはわざわざ教師が生徒一人一人に知らせる手間を省いたり掲示板に貼り出して生徒が一カ所に集まって騒動になることを未然に防ぐ為である。

そして今、グラウンドに来たクロガネは少しだけ困っていた。

「どうするかこれ……」

シルクハッターのブルーシートを返せないままだったのだ。大きなブルーシートは折りたたんでも結構な厚さと大きさになるから処理に手を焼いていた。

「……仕方ないか」

右脇と右手にブルーシートと空き缶を持って、左手でポケットからナンバープレートを取り出した。

「Ｆの１４……Ｆの１４……」

自分の指定席のナンバーを呟きながら座席を探した。

１２６０席はある景色を見渡すと、座席ごとに大きかったり小さかったり、普通のパイプ椅子から高級そうな木製の椅子があった。おそらく生徒によって体格や家柄は様々だからこうなったのだろう。
とはいえ、こうも露骨に区別されたらされる方としては少なくともいい気分ではなかった。しかし、選りすぐりのエリートを入学試験でさらにふるいにかけるような完全実力主義の学校であるからこんなことがあっても分からない話ではなかった。
「俺はニンベンだから普通の大きさとレベルのパイプ椅子だろうな」
迷いながらも指定席に到着すると、それはクロガネの想像通りのものだった。ただ、隣の椅子は木製で座面には毛布を敷いて脚や背もたれは羽毛仕立てにした異常に高級な作りだったのが気になった。
自分の席の背もたれに貼られたシールをナンバープレートを通して見ると、大きく《天》の文字が浮かび上がってきた。
席に着いて膝の上にブルーシート、足元に空き缶を置いて待つこと数分。初めはまばらに人が座っていき、次第にその密度を濃くしていった。
空を見上げると、そこは雲一つない晴天で絶好の始業式日和だった。いい天気過ぎたので、クロガネは思わず欠伸を出した。
「アホ面をする暇があったらどいてくれないかな」
欠伸顔のまま横を見ると、そこにはきれいな身だしなみと肩まで伸びた男子としては長い銀髪の男が立っていた。
見た目はいかにもお金持ちといった風であり、スペースがあるのにわざわざクロガネをどかそうとする辺りから傲慢（ごうまん）な性格をしているのだと考えることができた。
クロガネは自分を見下してくるこの男を無性におちょくりたくなり、人の悪い笑顔をうっすらと浮かべた。
「おお悪いな。えーっと、どこの七光りお坊ちゃまだ？」
最初に銀髪はその言葉にカチンと来たらしく、クロガネをオブラートに包むように上品に馬鹿にした。
「まったく、今も昔も貧民は礼儀がなっていないものだな」

「自分が礼儀正しいと思っていること自体おこがましいことだと思うがな」
次に銀髪はその言葉に少しキレたらしく、クロガネを普通に悪く言った。
「君はどうせその膝の青い紙が家なのだろう？　似合っているよ」
「所詮お前は豪邸という名のお山の大将なのだろ？　ピッタリだぞ」
最後に銀髪はその言葉にブチギレたらしく、クロガネを大層口汚く下品に罵りだした。
「黙れゴミクズの分際が！　私の前に存在すること自体おこがましいぞ！」
「言い回しが二番煎じだ。語彙と脳みそが足らんな」
クロガネが仰々しくため息を吐いたのを見た銀髪は怒りで打ち震えていた。その様子を流し目で見ていたクロガネはからかいがいがあるからもっと遊んでやろうと思った。
しかし、銀髪はこれ以上は無意味と判断したのか、突っかかることを止めてしまい、クロガネを避けて隣に座った。
と思ったら、最後に捨てゼリフを吐いた。
「君みたいなガキと同じクラスにはなりたくないな」
「まず同じクラスになることがありえないからな。お前バカだろ」
二人の間に起こった誰の目にも耳にも入らない小さな戦争はクロガネの圧勝に終わった。
顔を真っ赤にしている銀髪がギリギリと歯ぎしりを立てているのを聞いたクロガネはわざと聞かれる音量で含み笑いをした。

クロガネと銀髪の悪口戦争が終結した約１０分後、全員が席に着いたことを確認した教師の一人である中年が開会の辞を述べた。
「これより、入学式兼始業式を始めます。一同起立。礼。着席」
覇気の感じられないショボショボした声で中年教師は全校生徒を立たせ、お辞儀をさせ、座らせた。
「始めに、校長からからのあいさつです。校長先生、お願いします」

中年教師が促して朝礼台に上らせたのは白くて長いひげと人の良さそうな笑みを浮かべているご老体だった。
「え～在校生はおひさしぶりです。新入生は初めまして。新入生に言っておきますが、我が校では文武両道などと生ぬるいことはさせません。それぞれの行きたい道を極めてください。以上です」
随分と簡単で突飛なあいさつをした校長に新入生たちは面食らってざわめきだしたが、クロガネはまた眠気がぶり返してきてそれどころではなかった。油断したら一気に眠りの谷の底に突き落とされるところまで来ていた。
「校長先生、ありがとうございました。続きまして、新入生総代のあいさつです。ハクギン・ムーンナイト君、お願いします」
「はい」
返事をしたのはクロガネの隣に座っていたあの銀髪だった。
サクラ高では、新入生総代のあいさつは面接、筆記、実技の全てでトップを取っている一人しかすることを許されず、今までのサクラ高の歴史でその偉業を成し遂げた者はいなかった。
これは新入生の頂点であることを暗に示しており、3年になった時にはサクラ高生徒の頂点に立つ可能性が十分にあるということだった。
今度は事情を知っていながらも新入生総代のあいさつがあるとは思わなかった在校生がざわめきだした。
席を立ったハクギンは前を通り過ぎる際にクロガネを蔑むように鼻で笑った。しかしクロガネはどこ吹く風、一瞥もせずに寝息を立てていた。
少しも自分に歯牙にもかけないクロガネに舌打ちをして、前まで来て朝礼台に上ったハクギンはいきなりとんでもないことを話し始めた。
「あいさつは抜きで単刀直入に言います。私に逆らう者は容赦しません。たとえそれが上級生や教師であってもです。もちろん、指図や意見はいいですよ。ただ、反逆だけは絶対に許しません。絶対に

です」
　最後に強められた語気によって、漕いでいた船を止めて目を覚ましたクロガネは、ハクギンが朝礼台に立っていることと生徒や教師が戦慄していることに気付き、眠っている間に起こったことを全て察した。
　クロガネは別におちょくる相手が自分よりもレベルが上であることに悔しがることはなく、むしろさらにおちょくりたくなってすごく不気味に笑った。
「ムーンライト君、ありがとうございました。続きまして、後援者の祝辞です」
　ちゃんと話を聞いていたのか不明だが、進行役を担当している老年教師は全然臆していない様子と平然とした口調でハクギンを席に帰した。
　その後はフロウラル皇国の皇王やＰＴＡ会長、教育委員会のお祝いの言葉が書かれた原稿が話された。もちろん、長ったらしい話が大嫌いなクロガネは再び眠りの世界に飛び込んでいた。
　校歌斉唱も終わって入学式兼始業式も終了に差し掛かり、私語が蔓延してきたところで校長から緊急の話が入った。
「あぁ～、言い忘れていましたが今ナンバープレート越しにシールが光って見える生徒は放送があってから校長室に来なさい。それ以外は教室で待機で。それでは、良い１日を」
　校長は朝礼台を下りて、グラウンドの脇に設置されているベンチに腰掛けて茶をすすりだし、教師陣は職務に戻る為に次々と校舎内に入っていった。
　新入生は自分のシールをナンバープレートを通してもう一度見たり友人になるかもしれない人間と親交を持つ為に話したりしながら教室に向かい、在校生もハクギンの噂をしたり後輩になる新入生を観察したりしながら教室に向かった。
　ハクギンは何故呼ばれる人間がいるのか分かっていた。それは、自分ほどではないが特別な人間が新入生の中にほんの一握りだけい

ると確信していたからだ。
確認の為にハクギンはナンバープレートを覗き込み、驚いた。自分のシールが光っていることは当然と踏んでいたのだが、隣でぐうぐうと眠っているクロガネのシールも光っていたからだ。しかも自分のよりも輝いているようにも見えた。まさかと思って目をこすって二度見したが、事実は変わらなかった。
これによりハクギンは、クロガネは口だけの人間ではないと思った。
寝ているクロガネを起こすためにハクギンは肩を揺すった。
「おい起きろ。校長が後で校長室に来いとのことだ」
「……んっ？　ああ、寝ていたか。ありがとう」
「忘れずに校長室に行くのだぞ」
「ああ……おい」
「何だい？」
「どうして俺なんぞに話しかけた？」
ハクギンは一呼吸おいて意味深に答えた。
「君とは、何だか浅からぬ因縁ができそうな気がしたからかな」
そう言い残して去っていくハクギンを見送るクロガネは一人立ち尽くしていた。さすがのクロガネも最後の話は理解に苦しみ、頭の上に大きな疑問符を浮かばせた。
クロガネは疑問を消そうと考えているとまた眠たくなり、フラフラとおぼつかない足取りでグラウンドの中心に向かって歩き、寝ぼけて独り言を言い始めた。
「というか……」
――ライバル。それは、お互いを高め合う好敵手のこと。
「校長室ってどこだよ……（バタッ）」
知り合った二人はライバルとなるのか、はたまた他の何かか――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6189z/

ヒーローメーカー！

2011年12月25日19時55分発行